キャリアデザインをめぐる日本語母語話者と日本語学習者の対話の試み

――日本と台湾を結んだオンライン交流の実践から――

横田　和子*・陳　君慧**

（受付　2022 年 5 月 16 日）

1.　は　じ　め　に

コロナ禍において高等教育においても様々なオンライン国際交流が展開し，もはや定着してきている（村田：2022，竹井他：2022）。オンライン交流の初期には繋がっただけでも参加者にとって満足感があったかも知れないが，当然，繋がって何をするのか，内容の深さということが課題になってきている。本稿では，日本と台湾を結んで実施したキャリアデザインをテーマとした主な使用言語を日本語とするオンライン交流の実践の意義と課題を，学習者の交流内の発言および授業前後の提出物から分析し，交流の促進あるいは阻害の要因，内容の深まりのための仕掛けについて考察する。その上で，本実践が学習者にもたらした意味があったとすればそれは何か，国境を超えて若者がつながり，日本語を共通言語として相互にエンパワーする授業づくりのための課題を明らかにする。また，双方の授業の履修者は，もともと異文化への関心の高い学生であることが予想される。しかし，長引くパンデミックにより内向き思考・縮み思考が加速することも懸念される中，こうした機会を儲けることで，異文化への関心の高さを損なうことなく，自由に，柔軟に生き方を発想するためのきっかけになればと授業を設計したが，その目的が達成されたのかどうかを検討するとともに，オンライン交流の更なる内容の改善のための示唆を導きたい。

2.　本稿におけるキャリアデザインが目指すもの

高橋（2017）によれば，キャリアと語ること（ナラティブ）は親和性が高く，聴いてくれる人がいるからこそストーリーは豊かになり，自分でも気づかなかった，「語られてもおかしくないのに語られていないこと」への気づきが生まれたりする。ここではプロのカウンセラーが登場するわけではなく，言語レベルの問題もあるが，語りを媒介にすることで，高橋のい

* 広島修道大学　国際コミュニティ学部・国際センター
** 國立屏東大學　應用日語學系（国立屏東大学　応用日本語学科）

う，語り手と聞き手が共同作業で未来を語る「共構築」につながればと考えた。

ここで筆者らは，キャリアデザインの意味を，進路選択や就職先選びといった狭い意味ではなく，生き方そのものをあらためて振り返り，表現する時間にしたいと考え交流を企画した。高等教育におけるキャリア教育はどうしても出口の就職支援に向けた内容に傾きがちだが，筆者らは企業社会，経済活動を中心とした「社会」の要請に基づく，企業が求める「人材」育成のためのキャリアデザインへ特化することに違和感を持っている。むろん，経済活動は社会の重要な機能であり，それらを否定するものではないが，それだけで社会が成り立っているわけではないことは，近年の持続可能性をめぐる議論においても明白である。

長く日本語教育に関わってきた得丸さと子は，大学生向けのキャリアデザインの講義を一枚の写真から始めたいという[1]。「焼き場に立つ少年」[2]。1945年，長崎でアメリカの従軍カメラマン，ジョー・オダネルによって撮影されたこの写真は，原爆投下肯定論が圧倒的だった第二次世界大戦後のアメリカで，オダネル本人によって43年間もの長きにわたりトランクの中で封印され続けていた。90年代になってオダネルが意を決し写真を公開すると様々な論争を引き起こした。

写真 1　「焼き場に立つ少年」

2017年には核兵器廃絶に関心を寄せるローマ法王フランシスコによって「戦争がもたらすもの」と記されたカードが配布されたり，後年もドキュメンタリー番組が作られ続けたりする[3]など，長きにわたり人々を揺り動かし波紋をもたらし続けている。

1　このアイデアは2020年 8 月，得丸と第一筆者との打ち合わせ中，ZOOM での雑談の中で共有された。
2　写真は，http://www.kirishin.com/2019/11/22/39020/
3　一例として，NHK「ETV 特集　焼き場に立つ少年を探して」（2020年 8 月 8 日放送）がある。

この写真に応えること，こういう写真を撮影せねばならない社会について検討し，再びそうした社会を招来させぬために，一人ひとりができること，やりたいこと，果たさねばならない役割を検討すること，経済的成功や利潤の追求の果てに地球の資源を消尽しつくす前に，一人の市民として幸せに生きること，よく生きること（ウェルビーイング）を実現すること，そのために自らの生きる社会や歴史との関わりを展望し，地域を超えたつながりを意識すること，そうした課題を意識したキャリアデザインがあっても良いはずだし，そうした要請に応えるキャリアデザインは，持続可能性の危機と言われる現代において，むしろ必要ではないだろうか。

以下に記述する筆者らの実践では，直接担当教員がこうした問題意識について学習者に向けて語ってはいない。上記のような問題意識を先に学習者に伝えることは，結果ありきで誘導的になり，自分のことばで語ることを阻害する恐れがある。だが，得丸の意図の背後にある意識に象徴されるような要素が加われば，大学におけるキャリアデザインが単なる出口支援のための教育であることを脱し，経済が社会および環境とバランスを保つ社会の構築に貢献し，一人ひとりが市民社会のなかで「よく生きる」ための方向性を導く教育になりうるのではないだろうか。

3. 実 践 の 概 要

上述した既存のキャリアデザインへの疑問や筆者らの意図については筆者らの胸の内に収め，学習者には共有することなく，交流そのものは以下のような比較的単純な目標のもとに位置づけた。まず，台湾側のクラス（以下屏東）は，専門で学んでいる日本語を用いること，それだけでなく，日本語と自分との関係を振り返ること。また日本側のクラス（以下修道）は，科目名でもある「外国語としての日本語」について，非母語話者と対話しながら実践的に学ぶこと。そしてその上で，双方ともに自身のキャリアを検討する機会とすることとした。以下は実践の概要である。

20XX 年10月，11月の 2 回に渡り，第一筆者が担当する授業「外国語としての日本語」の履修者23名（ 5 学部， 1 年生17人， 2 年生 3 人， 3 年生 3 人），第二筆者が担当する「日語溝通與談話（一）」の履修者35名（応用日本語学科 3 年生）を対象として，Microsoft Teams を用いたオンライン交流を実施した。初回の交流ではテーマをあえてキャリアデザインとせず，「おすすめの○○」として，アニメやグルメなど，なんらかの「おすすめ」について自由に紹介し合い，修道クラスは相手の日本語力についての感触を掴むこと，屏東クラスはネイティブの学習者と話す緊張をほぐすことを目的とした。 2 回目の交流では互いのキャリアデザインについて紹介し，質問し合うことを主な課題とした。 2 回とも原則として同じメンバーで，

ペアまたはトリオという少人数の単位で交流ができるよう，オンライン上に23の小部屋を用意した（人数の関係から，屏東２，修道１という組み合わせが生まれた）。小部屋では約20分，ペアまたはトリオで交流を行ない，メンバーチェンジをした上でさらに20分，交流を行った。

参加者は２回とも交流の１週間前までに Padlet 上で各自スライド１枚を共有した。２回目のスライド作成においては，屏東クラスでは久保田（2018）を参考に「これまでの自分」「これまでの自分と日本語」「死ぬまでにやりたいこと」「これからの自分と日本語」という４つのテーマが指定された。修道クラスでは特定のテーマの指定はなかったが，横田（2017）を参考に，授業内で「子どもの頃の夢」「子どもの頃を色で表すとしたら」「未来の自分が今の自分に手紙を書くとしたら」などの問いをいくつか提示してから，スライドの作成を指示した。あらかじめ，夢や目標がまだ決まっていないこと，迷っていることなども自由に表現するように説明した。また，修道クラスでは「やさしい日本語」についてもごく簡単な説明を行ない，屏東クラスでは，インタビューや PREP 法[4] 等の構成を用いた回答および発表の練習を重ねた。

なお，それぞれの授業での本実践の位置付けは異なる。屏東クラスでは，２回の交流は，４年次で経験するインターンシップや，卒業後の就職に向けて，自分のキャリアと向き合いながら日本語を用いてインタビューをし合ったり，まとまった内容を論理的に説明したりする能力の向上を目標とした授業の一環として行われた。初回は全授業18回のうち８回目に，２回目は11回目に，今までの自分の人生のふりかえりが終了し，これからの自分について考え始めるタイミングで行われた。一方，修道クラスでは，母語話者が「外国語としての日本語」を学ぶ必要性と，非母語話者が日本語を学ぶ上での環境や困難について学習したのち，実際に日本語学習者との交流を体験する機会として実施した。初回の交流は全授業15回のうちの７回目，２回目の交流は８回目にあたる。外国人と話したことがない学生，英語でしか外国人と交流したことのない学生も多い中，日本語での交流経験によって，自らの母語に意識的になることも狙いとした。キャリア教育の授業ではないため，ここではキャリアはあくまで交流の話題としての位置付けとなっている。

4.　調査の結果より

交流当日は参加者の同意のもと動画をそれぞれ記録し，交流後のふりかえりの記述についてはテキストマイニング処理[5] およびコーディングを併用して分析した。以下に，それぞれの

4　PREP 法とは，面接やプレゼンテーション，ビジネス文書等のビジネスの場で用いられる文章構成方法であり，「日語溝通與談話（一）」では，その PREP 法を使えるようになることが，その目標の一つであった。

5　樋口耕一の開発したテキストマイニング用アプリケーション KH coder を使用した。

クラスのふりかえりについて記したのち，具体的にどのような会話がなされたのか，いくつかの事例を検討してみたい。

4-1　修道クラスのふりかえりから

修道クラスでは，「本日の交流会をふりかえり，良かった点，困った点，自分の日本語コミュニケーションについて考えたこと，キャリアについて考えたことを自由に書いてください。」という設問を課し，Moodle で記名式で提出させた。

総抽出語数6204，異なり語数889を分析した結果，７語以上の共起関係を結んだ上位60語のクラスターの傾向として，以下の傾向が見られた。

1）相手の日本語とキャリアについて（クラスター01）
2）互いの外国語学習と勉強について（クラスター02）
3）将来の夢について（クラスター03）
4）価値観の多様性について（クラスター04）

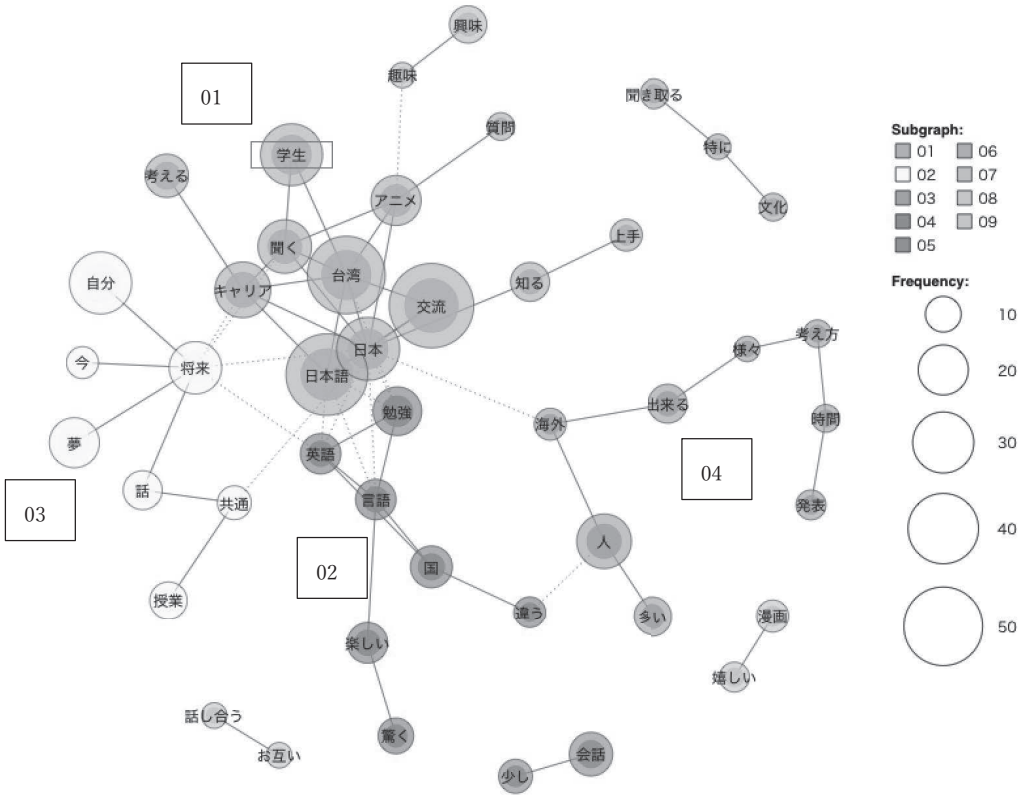


図 1　修道クラスのふりかえりの共起ネットワーク

具体的にみていくと，01)「相手の日本語とキャリア」について，修道クラスからは「相手の方の日本語が驚くほど上手」「正直僕の日本語より上手い気がし」たなど，相手の日本語力を評価するコメントが相次いだ。しかし少数ながら「日本語で話すとなると意味がちゃんと通じなかった」「はきはきと話したつもりでいても，ちゃんと伝えられていない場面が多くて少し戸惑」ったなど日本語の問題についての記述もあった。また，「キャリアデザインってこういう考え方もあるんだと感銘を受けました。それと同時に衝撃も受けました」「同じ国で生活している同年代の人とでもキャリアについて話す機会があまりなかったため新鮮」といった肯定的な記述がある一方，「キャリアよりも雑談の時の方が盛り上が」ったとの記述もあり，個人差，グループ差が生じたことがうかがえた。02)「互いの外国語学習と勉強について」は，「習い始めて二年目，三年目といった方が多かったですが僕の10年間の英語よりも素晴らしい」など，自分の英語と相手の日本語を比較する者，外国語の勉強法について話しあったという記述や，「僕たちも英語を小学校五年生くらいから勉強をしているけれど，あんなにも上手になるとは思えないのでとても台湾との言語の勉強の差を感じ」た，「英語学習に励んでいる身として見習わなければならない」との記述があった。03）の「将来の夢について」は，屏東クラスの日本や海外で働きたいという働く場所について，また「通訳・翻訳をしたい」などの具体的な仕事の内容を聞いて，「将来のキャリアについてより考える必要があると再認識」したといった記述や，逆に「私と同じく夢もなく選択途中の段階である学生がいたりと，十人十色の意見で逆に親近感が湧いた」「目標がまだ決まっておらず，探している途中であると聞き，自分もその立場にあるため共感する部分が多」かったなどの記述があった。「一番驚いたのは，将来日本語を使った職業に就きたいという人が多かったことです。僕は英語を勉強していますが将来使おうとは思ってもいなかったから」という記述にあるように，外国語の勉強がキャリアに結びつくという発想そのものに，複数の学生が刺激を受けていたことが窺える。「私もなにか力を入れて取り組めるものを見つける必要があると痛感」との記述もあった。04)「価値観の多様性について」は，「国が違えばその人の持つ経験や境遇も違うので，私達が共感し合える事は少ないだろうという偏見を心のどこかで持っていたが，そうとも限らない」「様々な意見を交換することが出来たため別の議題で同じような交流会が出来れば語学交流的にも意見交流会的にもまた違った興味深い話が出来そう」との記述が見られた。

初回交流では話題のほとんどを「アニメ・Youtuber・食べ物」が占めたが，２回目ではテーマを「キャリア」とすることで，修道クラスの学生にはいい意味でのショックがもたらされたようにうかがえた。同じ学生同士，同じ話題を設定しても，相手が話しているのは外国語である日本語であり，自分は母語で話していることから，交流しつつもどこか焦りのようなものも生まれていたかもしれない。交流においては困ったことは「あまりなく」「やさしい日

本語が難しい」という点は今後の課題になった。

4-2　屏東クラスのふりかえりから

屏東クラスでは，「日本側のキャリアについて収穫，発見はありましたか」「自分のキャリアについて収穫，発見，変化はありましたか」「日本語でのコミュニケーションについて収穫や発見はありましたか」「その他の収穫や発見はありましたか」「今日の交流で困ったことはありましたか」「全体的に今日の交流はどうでしたか（５段階評価，以下「満足度」）」「それはなぜですか」等７つの設問について，思ったことが十分伝えられるように中国語で記入するように指示し，Google フォームを通した記名式での提出を求めた[6]。そして，その自由回答部分をテキストマイニングにかけ，総抽出語数4500・異なり語数912を分析したところ，５語以上の共起関係を結んだ上位60語のクラスターは以下のようになった。

1）キャリアの日台比較（クラスター01）
2）交流の機会を持てたことについての感謝および次回への期待（クラスター02）
3）前回の交流からの成長（クラスター03）
4）自分の能力不足への気づき（クラスター04）
5）相手のキャリア（クラスター05）
6）気まずさ（クラスター06）
7）キャリアにおける相手との共通点（クラスター07）
8）緊張・面白さ（クラスター08）
9）おしゃべりできたことによるうれしさ（クラスター09）
10）日本語による意思の疎通（クラスター10）
11）事前の準備への反省（クラスター11）

まず，キャリアについて，01）「キャリアの日台比較」では，「日本の学生は，将来の仕事について頑張って考え，行動も起こし，自分がやりたいことがわかっていた」「自分は日本の学生と違って，行き当たりばったりで，将来に迷っている」「国を問わず，広島修道の学生にも将来に迷っている人はいるとわかった」「台湾には就職活動がないことを教えたら，驚いていた」等，日本と台湾の大学生のキャリアに対する考えや行動，文化について，比較検討を行っていた。そして，05）「相手のキャリア」では，「２人ともスポーツ関連の仕事がしたいと言っていた。たぶん日本社会が子どもの好きなことを伸ばそうとしているからだろう」「今広島平和記念公園でガイドをしていて，多くの人にその歴史を伝えたいそうだ」，07）「キャリアにおける相手との共通点」では，「自分と同様ガイドになりたいと言っていたが，彼女の

6　紙幅の都合上，質問項目や学生の回答は，第二筆者による日本語訳のみを記した。また，学生の入力した繁体字の中国語を KH coder で扱えるように，テキストマイニング処理の際は簡体字に変換した。

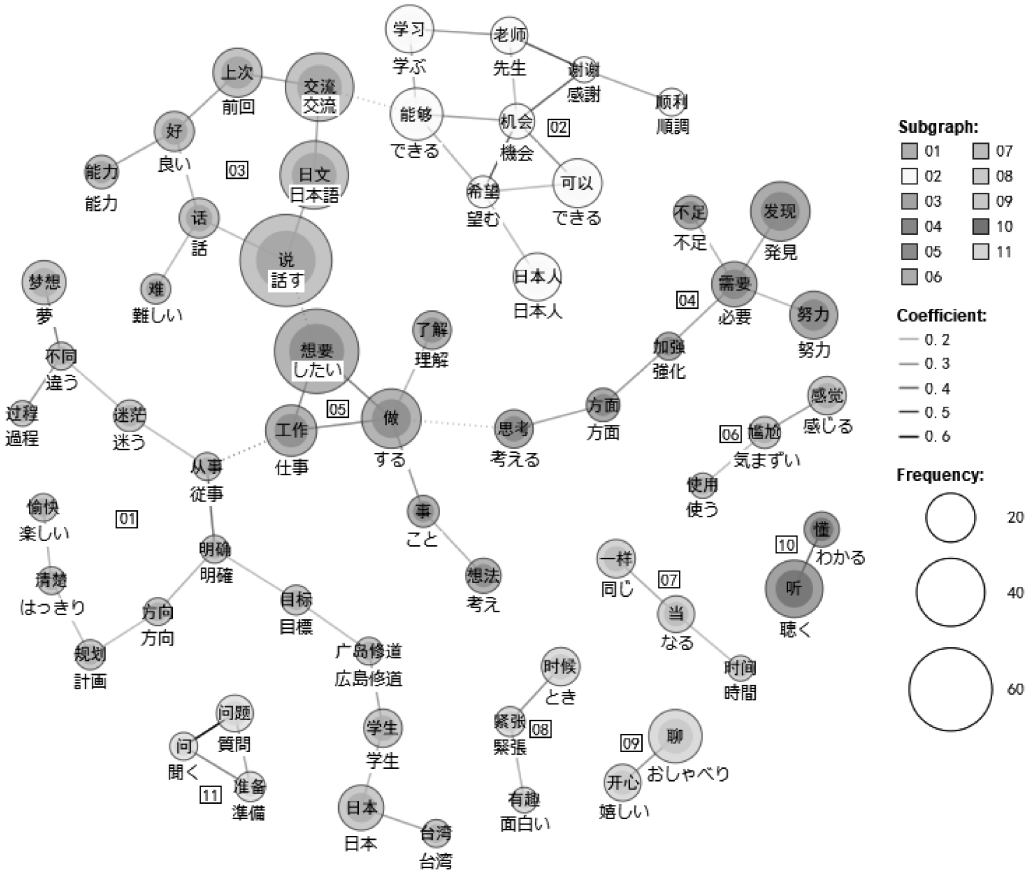


図 2　屏東クラスのふりかえりの共起ネットワーク

理由は違っていた」「相手も私と同じ境遇で，彼女とたくさん話した。それに，私も昔警察になりたいと思っていたので，X さんも同じだとは思わなかった」等，修道クラスの学生のキャリアについての考えを聞いて，より深く日本や広島について考えたり，日台という国の枠組みを超えて共通点を有する一個人として，交流相手を捉えたりしていたことがわかる。また，04)「自分の能力不足への気づき」では「日本語だけでなく英語も強化しないといけない」「自分と同じようにガイドになりたい人がいた。でも，自分はまだ努力しなければならないところがたくさんあるような気がする」というように，キャリアとの関連において英語やその他の能力について自分の現状を再確認し，今後の行動につなげていくことの重要さを感じていた。このように，キャリアについては全体的に，相手と比べて自分は思考していない，自分は足りないところがあるという主旨の内容が目立っていたが，それは，交流の時間内だけではなく，その事前準備として作成を求めたスライドにも反映されていた。内容に多様性の見られる修道クラスのスライドに対し，屏東クラスのスライドは35枚中，「これまでの自分」と

図 3　屏東の学生の作成したスライドの例

して悩んだり責められたりしている人物の絵が16枚，本や学校，勉強している人物などの絵が10枚，「死ぬまでにしたいこと」として海外旅行に関連する絵が23枚と同質性が高く，没個性的であったことからも，修道クラスとの交流の時間が，多くの屏東クラスの学生にとって，自分のキャリアデザインの不足に否が応でも直面せざるを得ない，衝撃を伴った時間となっていたことが想像される。

次に，日本語については，03)「前回の交流からの成長」では「前回と比べ，今回は比較的怖がらずに日本語を話せた」，08)「緊張・面白さ」では「今日はあまり緊張せず，自分の考えを伝えたり，質問したりできて，雑談も面白かった」，09)「おしゃべりできたことによるうれしさ」では「普段学んでいる日本語を練習できて本当にうれしい」，10)「日本語による意思の疎通」では「文法を間違えてしまったような気がするが，相手はわかっていたようだ」等，交流を通して，自分の前回からの成長，実際に普段学んでいる日本語でコミュニケーションを取ることによる面白さやうれしさ，思ったよりも日本語による意思の疎通が困難ではなかったことへの気づきといった，ポジティブな感想を持ったことがわかる。しかし，その一方で，04)「自分の能力不足への気づき」の「敬体と普通体をずっと混ぜてしまい，自分の会話能力をもっと強化する必要があると思った」，06)「気まずさ」の「頭に言いたいことはたくさん浮かぶのに，何も言葉にできず，互いに何を聞けばいいかわからず，ちょっと気まずかった」，10)「日本語による意思の疎通」の「自分の言ったことを理解してもらえたか，自分の文法が合っていたかわからなかった」，11)「事前の準備への反省」の「誰も質問しなかったり，新たな話題を切り出さなかったりして気まずい場面があったので，もっと話題を準備しておくべきだった」等のように，実際にコミュニケーションのために使用した自分の日本語や自分の事前準備への反省，日本語能力や質問切れ，話題切れから来る気まずさが綴られ，交流における意思の疎通に困難を感じていた学生もいたことがうかがえる。

また，屏東クラスには，上述したように交流後のふりかえりにおいて満足度を尋ねている。具体的に見ていくと，最も満足度が高い５が34.3%，４が40.0%，３が22.9%，２が5.7%

で，１と回答した学生はおらず，概ね満足度は高かったが，３以下の学生も３割近く存在していた。そして，交流において困ったことについても，あまりなかったという修道クラスに対し，屏東クラスには多くの記述が見られた。そこで，「今日の交流で困ったことはありましたか」への回答部分を対象にコーディングを行ったところ，日本語で伝えられない，理解できない，語彙量不足等の「自分の日本語能力」が51.0％と最も多く，音が悪く良く聞こえない，ネット環境が悪い等の「設備・環境」が14.9％，話題が思いつかない，うまく反応できない等の「自分のコミュニケーション能力」，緊張や文法を間違えるのが怖い等の「自分の心理状態」がともに12.8％，黙ってしまう，元気がない等の「修道大側の問題」が6.4％と続いていた。ここから，「自分の日本語能力」が最も大きな課題であったことがわかる。

4-3　実際の会話の事例

テキストマイニングの結果を見ていくと，筆者らが意図していたにもかかわらず学習者には共有していなかった社会課題と関連するキーワードは現れなかった。しかし実際に交流のビデオを見てみると，多数派ではないが，これらとつながる会話の萌芽があったことがうかがえる。以下に，会話の記録の抜粋を事例として見ていきたい。

事例１　Ａ（修道）Ｂ（屏東）

Ａ：広島にある原爆ドーム，知ってますか？

Ｂ：はい知っています。来たことがあります。

Ａ：あーほんとですかぁ！広島の人でも，広島で何が起きたか知らない人がたくさんいるし，日本でも，広島で，起きたことを，知らない人，が，たくさんいるので，それについて多くの人に知って欲しいという思いから，今，ガイドの仕事をしてます。

Ｂ：なるほど。

Ａ：原爆ドーム行ったとき，どうでしたか。

Ｂ：えー・・・（沈黙）・・・これ，それが，悲しい歴史と思います。

Ａ：うんうん，確かに・・・台湾では，歴史とかの授業で勉強しますか？

Ｂ：はい。

Ａ：あっそうなんですね。日本では，すごい，２ページくらいしか教科書がなくて全然勉強しないんです。

Ｂ：えっ？！そうなんですか？

Ａ：はい，全然勉強しないです。本当に・・・原爆が落ちました，ということが書かれているページがあるくらいで・・・ほんとに少ない時間で，広島に原爆が落ちたことについては，勉強します。

Ｂ：（３回ほど大きく頷く）

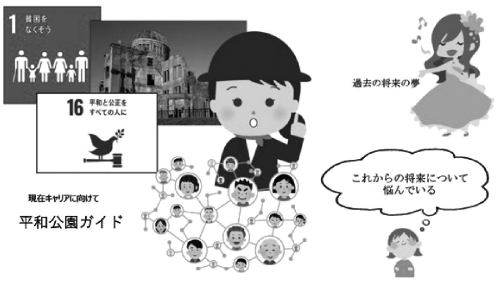


図４　学生Ａの作成したスライド

Ａが用意したスライドには，SDGs の17のゴールのうち「1. 貧困」「16. 平和と公正」について記されており（図４），準備段階からＡが自身のキャリアと持続可能性を内発的に関係づけて構想していたことがわかる。会話においては，Ａが過去に，歌手や看護師を目指していたことも話されている。しかし交流の中では，SDGs のゴールの描かれたスライドを画面共有しているにもかかわらず，ＡもＢも，SDGs のゴールに一切触れていない。

次の事例２は，Ｃ（修道），Ｄ・Ｅ（屏東），の会話の一部分の記録である。Ｃは，卒業後は自然環境関係の仕事に就きたいというキャリアを語った。

事例２　Ｃ（修道）Ｄ（屏東）

Ｄ：私のお父さんが，父が，教えてくれたんですが，日本は軍はないです，でも自衛隊があります，と教えてくれました，それは本当ですか？

Ｃ：はい，はい。

Ｄ：一般の男は，軍に入れなくてもいいですか？

Ｃ：えっとー，それはどういうことですか，普通の人は，軍隊に入らなくてもいいということですか？

Ｄ：はい，そうです。

Ｃ：えっとー，軍隊に，入りたいと，言わない限り，入らなくても大丈夫です。

Ｄ：えーっ・・・なるほど・・・。

Ｃ：台湾はみんな入るんですか？

Ｄ：一般の，男はね，もし問題がないから，ないなら，特に問題がないなら，あのー，今はね，６ヶ月の軍を，入らなくっちゃだめなんです。

Ｃ：えーっそうなんですね・・・。

Ｅの発言がないが，Ｅのビデオはオンであり，表情としてはしっかり会話に参加したことが窺える。自分たちをめぐる社会状況の差異はそれぞれ意外な気づきをもたらしたようである。その後話題は東アジアの情勢に移っていった。上記の２事例からは，過去の戦争をめぐる歴史やその記憶の継承，あるいは徴兵制や軍備など，国際的な安全保障に関わるトピックについて，語彙などの制限がありながらも語られていることがわかる。

事例 3　F（屏東）G（修道）

F：だから，最近は，だいたい，お金，を，稼ぐために，私がいろいろな準備や，いろいろなことが，します，未来はたぶん，まず，お金が・・・

G：自分も同じです・・・お金があまりある家じゃないので・・・

F：したいものが，お金が不足だから，何もしません，何もできません。

G：わかります，お金がないと，何もできないので・・・それは・・・がんばりましょう。

F：がんばります。

（中略）

G：自分の小さい頃を，色で例えると何色ですか？

F：たぶん，紫色？

G：素敵ですねえ！

F：小学校のとき，お父さんが亡くなって，いろんなところで＃＃＃（聞き取り不可）変わって，家族の問題が＃＃＃今ずっと，勉強しているから，勉強した後，家族の問題が，解決できま＃＃＃あの気持ちが，ちょっと紫かな？ブルーかな？

G：なるほどお，そうなんですね。私も，お父さんがいないんですよ。

F：同じ？！

G：お母さんと，妹，と。

F：私の部分は，お母さんと，弟。

（中略）

G：私が，小さい頃を，色で例えると，

F：はい。

G：黄色だと思います。なぜかというと，小さい頃，すごくキラキラしてて，希望に満ち溢れてたんですよ。

F：（笑）素晴らしい！（拍手）たぶん，誰でも，キラキラな人になりたい。

（中略）

F：一緒に，えっと，お父さんがいない，でも，

G：そうですねえ，お父さんいない，

F：いま，未来のために，今，一生懸命勉強して，

G：お金を

F：はい！お金，お金が重要だ～（満面の笑み）

事例 3 では，20年後の話から始まり，経済的な苦労などについて傾聴しあい対話を広げていた。これらの事例はあくまで一端であり，内容そのものについては，一部を除きふりかえりの記述には表出されなかった。ふりかえりの記述にまで昇華されていなくとも，またその深さに課題はあったとしても，事実としては様々な社会課題が話題に上っていたことが記録からは示唆された。上記の 3 つの事例は個人のウェルビーイングに関わる話題であり，同時に社会課題とも直結しつつ，キャリアと絡めて語られている点は共通である。

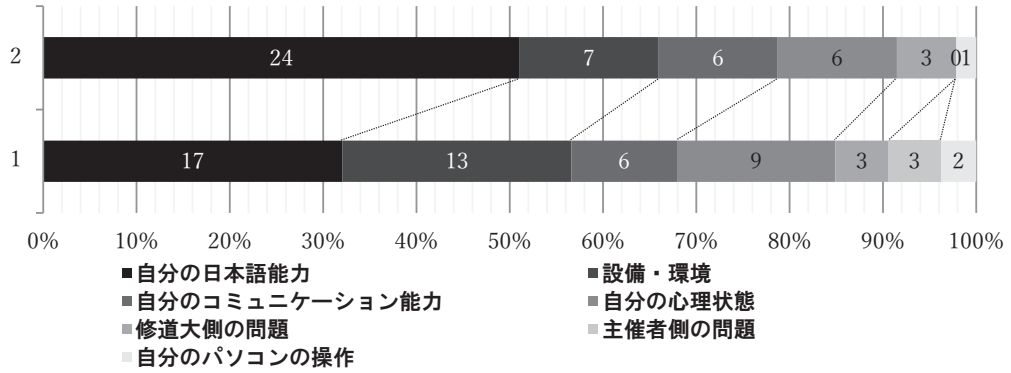
5. 考　　察

5-1　交流の阻害要因排除における1回目の交流の役割

交流を阻害する要因については，4-2の「困ったこと」や，満足度が低かった学生の理由が考えられる。「困ったこと」として最も多かった「自分の日本語能力」は，満足度が3以下であった学生の理由にも，「自分の日本語が本当にひどかったから」と記され，次に多かった「設備・環境」も，相手のカメラが映らなかったり音が小さかったりして交流自体に影響が出ていたことが，動画から確認された。しかし上述の通り，今回はその2週間前に，あえて「おすすめの○○」という全く関連のないテーマの交流の機会を設けている。では，これは2回目の交流の促進，または阻害要因の排除においてどう機能していたのだろうか。そこで，2回の交流における「困ったこと」に対する回答を比較すると，表1のようになった。

表1下段の1回目と上段の2回目の割合を比較すると，1回目に最多であった「自分の日本語能力（32.1%）」については明らかに増加しているものの，その他の「設備・環境（26.4%）」「自分の心理状態（17.0%）」，急遽予定と異なる相手と話すことになり混乱したなどの主催者側が対応可能な「主催者側の問題（5.7%）」については減少していた。減少した問題点は，例えば「設備・環境」は修道クラスの教室の使い方を見直す，「主催者側の問題」は急な欠席に対応するための調整時間を長く取る等，具体的な対策を短期間で取れたものであり，「自分の心理状態」は2回とも同じ相手と交流できるようにしたことが緊張の改善につながったものである。一方，大きく増加した屏東クラスの日本語能力や特に改善が見られなかったコミュニケーション能力は，もとより短期間では改善が望めないため，改善可能であった問題の減少と相まって，増加に転じたと考えられる。このことから，1回目の交流は，2回目の交流をスムーズに進めるための仕組みとして機能し，確実に交流の阻害要因の排除に

表1　屏東クラスの「困ったこと」における1回目と2回目の比較



寄与していたと言えよう。

5-2　屏東クラスのメンバーの組み合わせによる交流の阻害

また，満足度については，トリオとなったグループ分けにおける台湾の学生同士の相性による影響もうかがえた。例えば，日本語が流暢な学生とともに交流に臨んだ学生に，「自分の日本語能力がひどく，８割しか聞き取れず，話にも入れなかった」と満足度が３であった理由を述べていた学生がいた一方で，ともに日本語能力が低い学生２人で交流に臨んだ学生は，「２人とも頑張って話して，どう話していいかわからないときも，ジェスチャーで伝えられることがわかり，面白い経験だった」「少なくとも自分は積極的に交流していた」と，満足度が５や４であった理由を述べていた。これは，同じグループに流暢に日本語を操れる比較対象がいるために，自らの発言の機会が狭まるよりも，たとえ深い交流に至らなかったとしても，同レベルの学生同士がともに努力しながら，自らの交流への参加を実感できたほうが，満足度が高まったと考えられ，日本語の流暢さの劣る学生を流暢さに優れた学生が補佐可能なグループ分けが，必ずしも良いものではなかったことを示している。N3レベル未満からN1レベルの履修者が混在するクラスにおいて，日本語が流暢な学生がそうでない学生を補佐できる体制を作って内容の深さを優先させるべきか，流暢さが同程度の学生同士で均等に日本語を使用できる環境を優先させるべきか，難しい問題であるが，これを解消する方法として，日本語が流暢な学生や修道クラスの学生に，ファシリテーターとして動いてもらうことが考えられよう。今後は，交流前にそのような指導を事前に行うことで，内容の深さと均等な発言機会をともに保障することが可能となるのではないだろうか。

そして，もう一つ考えられる満足度低下の原因に，学習者のコミュニケーション能力がある。１回目は，普段中国語でも饒舌な学生と，その学生と仲の良い学生とを組ませていたのが，２回目では１週目に参加できなかった学生の調整のため，饒舌な学生を単独で別のグループへ移し，もう一人を普段あまり接点のない学生と組ませたグループがあった。しかし，その接点のない同士のグループにおいて，２回とも参加した学生は１回目の満足度が４であったのが，２回目では３に下がり，「今日は相手の元気があまりなかった，話していて少し気まずかった」，２回目のみの参加だった学生の満足度も３で「前回の交流の動画と違って，リラックスした感じではなく，今回相手はあまり機嫌が良さそうではなかった」と記していた。饒舌で仲が良い学生が入っていた１回目との盛り上がりの比較という点から，満足度に影響が出た例と言える。日本語能力以外に，学習者自身のコミュニケーション能力も交流の阻害要因となりうることを考慮すれば，国籍の違う相手との交流の前に，同じ国の学習者同士でも，普段から多くの授業を通して，あまり接点のない学生同士が協働しあえる機会を与えていくことが必要であると言えよう。

5-3 「気まずさ」の有無が示唆するもの

記録では参加者は皆，真剣に和やかに，またマスク越しでも多くが笑顔で会話を楽しんではいたが，修道クラスの「キャリアについてよりも雑談が盛り上がった」というコメントにあったように，キャリアを目的とした会話に深く入れたかというところでは課題が残るものとなった。その要因として「日本語教育の授業であり，キャリア教育の授業ではなかった」ことや，「大学に入りたての１年生が参加者の73％を占めた」という点を差し引いても，この点は課題があったと言うべきである。この点の克服のためには，屏東の学生と交流する前に，修道の学生同士でスライドを見せ合い，内容を吟味するなどの作業が必要だったと思われる。また，修道の学生のふりかえりに困ったことはあまり見られない。これは単純に喜べることではなく，むしろ困るような事態に陥るのを回避する，つまり沈黙を恐れるからこそ，気まずくならないような配慮をずっとしているとも考えられる。事実，修道のある学生は，「自分はしっかりと話してお互い気まずくないように心がけて25分間しっかりと日本語会話ができたのがよかった」と記述している。盛り上がることはもちろん悪いことではないが，気まずさや葛藤の中，沈黙の中に流れるものにこそ，本当に大切な対話の本質があると考える筆者の考えとは相反するものである。同様の心理的な機制は，相手が非母語話者だからではなく，母語話者同士であっても働くことが予想されるが，沈黙を恐れて表面的な会話になるなら本末転倒である。また，もしかしたら修道の学生には，相手に難しいことを言ってもわからないだろう，という「諦め」の気持ちからの回避行動もあったかもしれない。一方，屏東の学生からは困ったことがたくさんあったこと，特に「気まずさ」に関しては，日本語でうまくコミュニケーションが取れない，話題を切り出したり展開したりできないという葛藤の様子がうかがえる。つまり屏東の学生の味わった「気まずさ」には学びにおける意味があるのに対し，修道の学生の傾向としては，驚いたり，喜んだり，盛り上がるようなその場の配慮は十分しているが，「深く考える」という部分に課題があるのではないか。むしろ，母語だから，わかってしまうからこそ，思考が浅くなり，屏東の学生は，外国語だからこそ，より具体的に思考に挑んでいる，ということも言えないだろうか。多和田（2003）が述べるように，母語の外に身を置きキャリアを考えることと，母語に安住してキャリアを構想することは，双方の学生に質的な深まりの点で違いをもたらしたように思われる。とはいえ修道の多くの学生が，自身の外国語学習に関する意識について述べたり，外国語学習とキャリアをつなげて考える思考の不在に気づいたりしたことは，屏東の学生との出会いがもたらしたものである（例えば，大学で英語を勉強していて，小説家になりたいという修道の学生が，将来「英語で小説を書きますか？」と質問され，意表をつかれたような表情をしていて，考えたことはないと答えるなどの姿が見られた）。人によっては，今回の対話が，『エクソフォニー』でいう「母語の外に出る旅」とまではならずとも，母語の外に出る旅支度や計画づくりには寄

与するものがあったと言えるかもしれない。

これに対して，屏東クラスの学生が多く挙げていた「気まずさ」については，上述のように，日本語能力やコミュニケーション能力に関する文脈の中で頻出していたものである。1回目終了後，その対策として，2回目の交流に向けて，事前に質問や会話が途切れたときに使える話題とその日本語を準備するように伝えたが，5-1 で述べた通り，これらは短期間で解消できるものでなく，「事前に聞きたいことを準備したがほとんど使わず，消極的に相手からの質問に答えるだけになってしまった」というふりかえりのように，準備をしたとしても，緊張等でうまく使えなくなることもある。第二筆者が普段学生と接する中で，「同級生同士で毎日のように顔を合わせるのに，なぜ挨拶もしないのか」と聞くと，「よく知らない相手と話すと気まずいから」という答えが頻繁に返ってくる。現代の台湾の若者気質を表す言葉として「同溫層（エコー・チェンバー現象）」がよく用いられるが，普段から台湾人の学生同士でも気まずさを忌避したいという気持ちが強いことが，今回にも反映されたと考えられるだろう。しかし，そのような気持ちは交流の阻害要因となりうる。事前準備以外にも，交流では双方が沈黙する状況が発生しうること，しかしその沈黙は意味があることなので怖がらなくてもいいこと，うまく日本語にできない，話題が思い浮かばないことについて自己開示を行い，素直に相手に伝えることで，相手が助けてくれたり，同じ気まずさを感じている相手との距離がかえって縮まったりすることもあることを事前に教えておくことが，交流のさらなる促進につながるのではないだろうか。ここにおいても，国を問わず，異質な人間とコミュニケーションを取れる力の向上が望まれると言えよう。

5-4　屏東クラスの没個性的なスライドが示唆するもの

上述のように，屏東クラスは一学期間全て，日本語能力の向上だけでなく，自分のキャリアと向き合うことをも目標とした授業の中での交流であったため，4-2 の01）等が示すように，概ねキャリアについて何らかの収穫や葛藤を得ており，それはそれまでのキャリアデザインに対する思考が足りなかったことに起因するものであった。そして，事前のスライド作成という作業についても，「交流前の段階で作成したスライドの 4 つのテーマについて考えたとき，以前よりも自分の現状ややりたいことについてわかった」という記述があり，スライドの作成自体が，キャリアへのさらなる理解を促す一端を担っていたと考えられる。しかし，一体何が屏東クラスにこれだけ同質性の高いスライドを生じさせたのであろうか。

まず，「今までの自分」の同質性について，今回の交流に参加できなかった履修者を含む屏東クラスの履修者全40人を対象に，始業時に「なぜ大学で日本語学科を選んだか」について複数回答でアンケート調査を行ったところ，日本国籍を有する 2 人を除き，「日本や日本語，日本文化が好きだから」が28人（73.7%），「将来日本語を使って仕事をしたいから」が16人

(42.1%)，「なんとなく・仕方なく」が9人（23.7%）であり，6割に近い学生が将来の仕事と大学での専門分野を切り離して入学してきていた。また，今回のふりかえりを見ても，自分のキャリアデザインが不明瞭，または交流相手ほど具体的でなかったことに言及した学生は，35人中20人（57.1%）と6割近くを占めていた。台湾は大学進学率が8割を超す高学歴社会であり，長いこと，高等学校も職業科ではなく普通科に進み，大学を出て，修士や博士課程を目指し，高学歴を得ることこそが良い職に就くための保証と考えられてきた。そのため，学生は幼い頃から勉強は受験の手段という雰囲気の中で育ち，中高と朝7時半から8時には登校，9～10時間後の午後5時から5時半に下校，その後もさらに学校による補習か塾通いが続き，朝自習や補習，体育の時間も授業やテストに当てられる日常の中で，自分がしたいことについて十分に考える時間が持てず，それに基づいて志望学科を決定することが困難な環境にある。また，保護者らによる干渉も根強く，これは，勉強に明け暮れ，自分と向き合えず，敷かれたレールをただ走るしかなかった学生のスライドと重なる。

一方，久保田（2018）において，最も価値観が出るとされている「死ぬまでにしたいこと」という質問については，ウェルビーイングを意識できる質問であるはずだったが，多くのスライドが「海外旅行」をテーマとし，内容としては浅いものであった。しかし，その一方で，交流の次週に授業で行った，仕事やプライベートについての5年後，15年後，30年後を考える「未来史のワーク」では，そのふりかえりに「考えるのが非常に苦痛であった」という内容が散見された。「未来史のワーク」のように将来の自分の状態を考えるには，否が応でも自分の今後の変化と向き合わなければならない。Maslow, A. H.（1970）の欲求5段階説に照らすと，旅行自体は高次な欲求でもありうるが，多忙な日常生活から抜け出したいという低次の安全欲求でもありうる。葛藤が深い思考を促すという点から見れば，「死ぬまでにしたいこと」は「未来史のワーク」ほどの深い思考をもたらすことができなかった。つまり，交流用のスライドに，ほぼ海外旅行しか出てこなかった状況は，「死ぬまでにしたいこと」が自身の今後の成長について想像する際に生じうる葛藤を，回避可能な質問であったことを示している。屏東クラスにもスライドで国際ボランティアという夢を表現した学生はいたが，もしも社会貢献を含む自己実現欲求へとその思考を導き，「よく生きること」を意識させることを目標とするのなら，「死ぬまでにしたいこと」ではなく，例えば「死ぬまでになりたい自分」[7]というテーマを指定し，将来の自分についての思考を促すことで，より多くの葛藤をもたらすことができていたのではないかと思われる。

7　例えば，自分の墓碑銘「私の墓碑銘」や死亡記事「私の死亡記事」を想像するワークなどの活用も考えられよう。廣川（2017）を参照のこと。

5-5　今後への示唆

今回の実践は，メインテーマであるキャリアについての内容の深まりの点で課題が残った。一部で「同じ国で生活している同年代の人とでもキャリアについて話す機会があまりなかったため新鮮」「キャリアデザインって，こういう考え方もあるんだと感動した」などの声もあり，若者同士が国境を超えて未来について語り合う取り組みという点では，評価すべき点もあったかもしれない。しかし，より質的な向上を目指すのなら，以下のようにいくつかの改善点をあげることができる。

・事前課題を交流前のそれぞれの教室内で取り上げ，スライド作成においてもより「よく生きること」を意識できるようなテーマを指定し，交流の中身を濃いものにさせる。
・対話の目的を作り，対話が途切れない仕掛けを作る。例えば，各グループ内でのファシリテーターの設定，あるいは，学生 A があげた幼い頃からの夢の変遷と現在地のそれぞれ（歌手，看護師，平和記念公園でのガイド）には，共通の「何か」があるのではないか，という意味での「共通点探し」など。
・良いと感じた対話をいくつか選び，内容をシェアリングする，互いへ事後に手紙を書くなどの活動（ただしすでにその場で SNS を交換していることもある）。
・キャリア科目との連携を図る（修道クラスが，キャリアはあくまで話題としての位置付けだったため，学習者のモチベーションに課題があったのではないか）。
・さらなるふりかえりの時間（第 3 回の交流）を持つ。例えば，キャリアデザインをめぐる「屏東の学生の共通点」「修道の学生の共通点」「双方の共通点探し」などを検討しあうなどのワークショップが考えられる。「屏東の学生の方が自分の専門領域をしっかり踏まえている」「修道の学生の方がのびのびとキャリアを考えている」などの気づきが双方から出てきたかも知れず，そこからまた対話が生まれたかも知れない。そして，自己の夢がコミュニティからも影響を受けていることの気づきを促し，よりコミュニティにおける自己の生き方，キャリアへの意識が高まった可能性もあるだろう[8]。

6.　ま　　と　　め

今回のキャリアデザインをめぐるオンライン交流においては言語上，コミュニケーション上，様々な課題が見られたが，修道の学生にとっては自らの言語学習へのモチベーションを

8　例えば，新卒一括採用で「やり直しが効かない」日本と，卒業後に仕事を探し始め，空白期間に家で親から金銭的なプレッシャーをかけられやすいが，能力主義で転職が自由な台湾とでは，大学生の就職の仕方にも違いがある。キャリアを考えると言っても，日本と台湾の社会の違い，日本でいう「就職活動」の有無，それぞれの大学の違い（国立／私立）や学科・学年の違い，就職経験の有無，経済的プレッシャーの有無，もちろん本人の考え方や性格など，無数の要素が影響している。

見つめ直すなどの意識につながったほか，台湾に関心を抱き，コロナが明けたら台湾に行ってみたいと話す学生が増えたことなど収穫も少なくなかった。また，屏東の学生にとっては，普段インターンシップや交換留学の選考を通らないような日本語能力の学生までが，実際に同世代の日本人と日本語でコミュニケーションを取り，自らの日本語の学習動機を見直し，過度に文法等の誤りを恐れることがないことを実感できるという，普段の教室とは異なる収穫を得た時間となった。ここにあげた改善点を踏まえ，今後のオンライン交流の場づくり，設計に活かしていきたいと考える。

なお，最後にもう一度，キャリアデザインをウェルビーイングの視点から考えるという点に立ち戻ってみたい。第一筆者から見れば，屏東の学生の方が「成熟」しているように見えたが，それが台湾の政治的・社会的・文化的な状況からもたらされているのであれば，手放しに歓迎すべきことでもないかもしれない。逆に，第二筆者から見れば，修道の学生の方は，野球選手やサッカー選手，アイドルや歌手などを夢見てのびのび育ってきている学生が多く，恵まれているという見方もできる。教員同士も，キャリアデザインをめぐるあり方を議論し，大いに刺激を与え合うこととなった。

日本では，文科省（2018）がキャリア教育の推進を掲げ，小学校・中学校・高等学校でも職場体験やキャリアプランニングなどが当然のように実施されるようになってきている。もとより大学におけるキャリア教育も出口を意識した様々な実践がなされている。この流れは台湾でも同じであり，教育部（2018）が，小学校・中学校・高等学校における「総合活動」分野において，「自分のキャリアデザイン」「生活の営みと改善」「社会と環境への関心」を三本の柱とした教育改革を行い，早かった登校時間も2022年 9 月からは，まずは高等学校から遅らせることが決定，大学においても各部署が主催する活動や，卒業要件として一学期間から一年間のインターンシップが取り入れられるなど，キャリア教育をめぐる環境は改善されつつある。しかし，VUCA と言われる時代，国境をこえてさまざまな地球規模課題のもと，連帯し，協同することが求められる時代において，大学だからこそ，個人の職業選択・進路選択とは別の枠組みで，ときには国境を超えたより広い視点から自己と他者の，すなわち「私たち」のウェルビーイングを見つめるためのキャリアデザインの場を仕掛けることが可能なのではないだろうか。

※本研究は，JSPS 科研費（JP21K00641）の助成を受けて行なった研究の一部である。

参　考　文　献

久保田学（2018）『留学生のための就職内定ワークブック』日本能率協会マネジメントセンター

高橋浩（2017）「企業内におけるナラティブ／社会構成主義的キャリア・カウンセリング」渡部昌平・高橋浩・廣川進・松本桂樹・大原良夫・新目真紀『実践家のためのナラティブ／社会構成主義キャリア・カウンセリング』福村出版
竹井光子・横田和子・藤美帆・佐藤敏洋（2022）「コロナ禍におけるバーチャル交流――日本と台湾の連携事例から――」『広島修大論集』62-2, pp. 1–18.
多和田葉子（2003）『エクソフォニー　母語の外に出る旅』岩波書店
廣川進（2017）「離転職者に対するナラティブ／社会構成主義キャリア・カウンセリング」渡部昌平・高橋浩・廣川進・松本桂樹・大原良夫・新目真紀『実践家のためのナラティブ／社会構成主義キャリア・カウンセリング』福村出版
村田晶子（2022）『オンライン国際交流と協働学習：多文化共生のために』くろしお出版
文部科学省（2018）『キャリア教育の推進』https://www.mext.go.jp/apollon/mod/pdf/mext_propulsion_20180223.pdf（2022年 3 月18日確認）
横田和子（2017）「交差する自己と他者――『もう一つの声』に居場所をつくる」細川英雄・太田裕子編『キャリアデザインのための自己表現――過去・現在・未来を結ぶバイオグラフィ』pp. 149–166.（東京図書）
王慧瑛・林巧璉・徐如宜（2022.2.15）〈成功高中廢朝會，早自習引關注 黃捷推：把時間還學生〉《聯合新聞網》https://udn.com/news/story/122683/6099115?from=udn-catelistnews_ch2（2022年 3 月18日確認）
林晉如（2017.1.22更新）〈職前觀察從小學開始，打破「唯有讀書高」的迷思（課程發想）〉《翻轉教育》https://flipedu.parenting.com.tw/article/001182（2022年 3 月18日確認）
林毅（2020. 12.27）〈全球學校上課時間比一比 網一看大嘆：台灣根本血汗學生〉《中時新聞網》https://www.chinatimes.com/realtimenews/20201227000065-260405?chdtv（2022年 3 月18日確認）
教育部（2018）〈十二年國民基本教育課程綱要國民中小學暨普通型高級中等學校綜合活動領域課程手冊（定稿版）〉https://www.naer.edu.tw/upload/1/16/doc/2066/綜合活動領域課程手冊（定稿版）. pdf（2022年 3 月23日確認）
―――（2021）〈108 學年度高級中等學校應屆畢業生升學就業概況調查報告〉https://stats.moe.gov.tw/files/investigate/high_graduate/108/108_graduate.pdf（2022年 3 月18日確認）
潘乃欣・趙宥寧（2022.2.16）〈 9 月起高中生延後上學 不得要求8:10前到校〉《聯合新聞網》https://udn.com/news/story/122683/6100983?from=udn-relatednews_ch2（2022年 3 月18日確認）
Maslow, A. H. (1970). *Motivation and personality* (2rd ed.). Harper & Row Publishers.

Summary

Dialogue between Native Speakers of Japanese and Learners of Japanese on Career Design

—— Virtual Exchange between Japan and Taiwan

YOKOTA Kazuko* and CHEN Chun-hui**

This paper analyzes the challenges of the practice of an online exchange on the topic of career design conducted between Japanese and Taiwanese universities, in which the primary language used was Japanese. The subjects analyzed were the learners' statements in the exchange and their submissions, from which the factors promoting and hindering the exchange were discussed. We then attempted to identify what meaning, if any, this practice brought to the learners and the challenges for creating a class that connects and mutually empowers young people across borders. As a result, although various linguistic and communicative challenges were observed, it led to an awareness among native Japanese-speaking students of their own motivation for learning the language, and among learners of Japanese, even students with low Japanese levels were able to reevaluate their own motivation for learning the language and to learn Japanese without being overly fearful of grammar and other errors.

In this era of VUCA, solidarity and cooperation are required under various global issues that transcend national borders. We consider that higher education is the best place where it is possible and necessary to create career design opportunities for the wellbeing of self and others, i.e., "our" wellbeing, sometimes from a broader perspective, not limited to individual career choices.

* Faculty of Global and Community Studies, Hiroshima Shudo University
** Department of Applied Japanese, National Pingtung University